

# 平成25年度 富山市民 感謝と誓いの つどい

とき 平成25年8月1日(木) 午後1時30分  
ところ 富山国際会議場 メインホール

主催／富山市民感謝と誓いのつどい実行委員会・富山市

- |              |                |               |
|--------------|----------------|---------------|
| 富山市自治振興連絡協議会 | 富山市社会福祉協議会     | 富山市遺族会        |
| 富山市老人クラブ連合会  | 富山市民生委員児童委員協議会 | 富山市児童クラブ連絡協議会 |
| 富山市婦人会       | 富山市母親クラブ連絡協議会  | 富山市PTA連絡協議会   |
| 富山市小学校長会     | 富山市中学校長会       |               |

中学生作文最優秀賞

## 「神の山に見守られながら」

立山に 降り置ける雪を 常夏に  
見れども飽かず 神からならし  
(万葉集 巻十七)

いにしえの時代に、国守として越中に赴任した大伴家持は、立山を「神の山」ととらえていたようだ。夏の間も立山に白く残る雪は、本当に美しいと思う。普段は風景などに関心のない私達も、「わあ、山がキラキラしているね」「うん、雪が光っているね」と、登校途中に友達と話したりするくらいだ。現代を生きる私達と、ずっと昔の人が、同じ美しさに感動するなんて、考えてみると奇跡のようなことではないだろうか。変わるのではない美しさを保ち続ける立山が、多くの人に大切に守られてきた証だと私は思う。私は、小学生の時に、初めて立山に登った。険しい岩場や、美しい高山植物の咲き乱れる道は、遠くからしか立山を見たことのない私にとって、未知の世界だった。自然を守りながら、大切な立山を肌で感じられるように整備するということは、簡単なことではなかったと思う。山と対話できた偉大な先人がいたのかも知れない。私は家持が感じた「神の山」という意味が、少しだけわかったような気がした。

毎年八月一日、富山市で大きな花火大会がある。私は祖父から、花火が富山大空襲の犠牲者の鎮魂のために上げられ

富山市立堀川中学校三年生 松田 梨子

ているのだということを知った。そして、祖父や祖母にとつて、富山大空襲がどんなにつらく苦しいものであったのかということも知った。平和な世に生まれ、戦争の苦しみを経験していない私達にとつて、それは今の生活とはまるで別世界の一場面のように浮かぶ。しかし私達は、歯をくいしばって困難を乗り越えてきた方々が思い描いていた「未来」を、今生きさせていただいているのだ。二面の焼け野原から歳月を経て現在のようないい富山が生まれたのだということ、私達は決して忘れてはいけないと思う。苦しい中で、「富山の未来がこうあって欲しい」という強い思いを抱き続けることは、並大抵のことではないはずだ。町のいたるところから、先人の息づかいが聞こえてきそう。

二年後に、北陸新幹線が開業し、さらにスピーディーな暮らしが約束されている。工事の現場では、大きな機械が作業を進めている。しかし、よく目を凝らして見てみると、それを動かしているのは「人」だ。そもそも、新幹線を生み出したのも、人なのだ。富山に生きている私達は、先人の思いをしっかりと受け取り、「神の山」に見守られているのだという誇りを大切にしながら、未来をしっかりと見つめて歩んでゆきたい。

小学生絵画最優秀賞

三・四年生の部



「ドキドキ ワクワク パラダイスランド!」  
富山市立西田地方小学校 4年2組 大窪 葵さんの作品

五・六年生の部



「みんなで心を一つに! 明るい富山市」  
富山市立東部小学校 6年2組 中嶋 海香さんの作品

### 富山市のあゆみ展

- 日時・場所  
7月30日(火) 午前10時～午後6時  
7月31日(水) 午前9時～午後6時  
8月1日(木) 午前9時～午後4時  
富山国際会議場 1F交流ギャラリー
- 内容  
富山市の歴史の紹介や、市民生活の変遷を写真等のパネルで展示するほか、小学生が描く絵画「未来の富山市」も展示します。

このプログラムは再生紙を使用しています。

# 「空襲体験記」

富山市小杉 平井 静子

今から50年前、富山市は大空襲に会い、一夜にして焼野原となり私は罹災児となりました。その時の一夜の怖い体験を当時すぐに記録しておいたものです。

私は五番町国民学校6年生で祖母の家がある新庄へ疎開しておりましたが、丁度空襲の前々日に疎開先より家へ帰ってきておりました。7月中は、毎日雨が降り続いておりました。7月11日は朝からすっきり真夏の太陽が照り入道雲が湧き出し暑い日を迎えました。お昼ごろ向いに住んでおられる総曲輪国民学校の林先生が家にこられ、「今朝米軍機が来て、富山市を空襲するというビラをまいていったから、今晩は危ないから早く家から出た方がいいよ」と聞かされました。私たちはその時はそんな事はうそだと思っておりましたが、私の胸の中には本当だったかどうかと落ちつきがありませぬ。それで持つてくる横かばんに教科書、文房具必要なものをぎっしりつめていつでも出られる用意をしておりました。丁度その日は日発に勤めている従姉がお昼過ぎにやつて来て、母に「この間の福井県の空襲で逃げた人は助かったけど、焼夷弾を消して家を守っていた人は最後に逃げ場を失って犠牲になつていくから早めに逃げるように」と教えてくれました。私の家は母と5つ上の姉と私の3人家族です。夕方になると早めに夕食をすませてラジオを聞いておりました。8時半過ぎ、毎日のように入る警戒警報が入って来た。母は、「やはり、今晚は

危ないから早く逃げようね」と言われ、すぐに防空頭巾とかばんを下げて早目に家を出ることにしました。母は何か予感をしたのか長い間住んでいた家に「生懸命」お世話になり有難う」と言っておりました。

また、井戸の中へいくつも鍋を重ねて入れすり鉢や包丁、食器類や出来るだけ入れて蓋をして出ました。そして近所の人たちと共によつや田んぼの方へ目散に向いました。途中で皆ざわざわとあちこちより出てこられ、暫くの間に田んぼの道は行列になりました。10時頃であつたらうか。空襲警報がはいり敵機B29が不気味な音と共にやつて来ました。私たちは、草むらの中に隠れ空から見られてもわからない様にうつむいて頭巾をかぶり時々顔だけ出して空を眺めていました。30分以上もたったであらうか。B29の不気味な音も消えて空襲警報も解除になったので、家へ帰ることにしました。「何事も起らなくてよかった」と言いながら、皆もときた道をぞろぞろと帰り始めました。ふと空を見上げると茶褐色をした気味の悪い大きな月が夜空を照らしておりました。そして半分位帰った頃であらうか12時過ぎからまた空襲警報が入りました。私たちはもときた道を急いで走りました。沢山の人が急ぎ足で戻るので狭い道と田んぼは人でいっぱいになりました。続いてB29のドンドロンと言う不気味な音と共に照明弾が落とされ、パアと明るい音。焼夷弾が限りなく落とされる。私はキヤーと言つて目をつぶりました。母は早く早く私の手を引く張るので無我夢中で音を聞きながら走りまわりました。頭巾をそと上げて外を眺めると、西の方から真っ赤な焔、そのうちに私の家の方向もあつたという間に四方八方真っ赤に燃え、まるで火の中に生きている様な気がしま

した。絶え間なく焼夷弾が落とされ、ドーン、シヤー、パアの音と共に家がバチバチと燃える音、人間の悲鳴も聞え、火風の音も入り、人間の生き地獄を見ました。初めは足がふるえて、また、体を小川の中に隠していたせいか腰から下がたぷり水につかたて動けなくなり、また、母と姉は、ここにいると危ないからと生懸命私を引っ張るので私はこれではだめだと思い、大切なかばんを草むらの中へ投げ捨て、靴もぬぎはだしのままで本当に着のみ着のまま引張られる様に逃げました。とにかく火の中をくぐつても生きようと、生きる事しか考えず逃げました。逃げている間にいろんな人に会いました。川の中で、柳の下にうずくまつて、この世の人とは思えない顔でブルブル震えている老人を見ました。また馬が火を見てぜんぜん立ちれなくなっているのを見ました。私たちは、それを見ながらまた、逃げました。火はますます天をこがして街の方では火の中を人々が走っている姿が見えました。沢山の子供の泣き声が聞えたかと思うと、血まなこになって子供を捜している親たちもいました。私たちは、また逃げました。すると突然私たちの前に屋根瓦のような物がドンドンといくつも落ちて来ました。私は目の前がフラフラになりました。急に辺りがざわざわとして、母も何が落ちたのかわからないので人に聞いてみたら、味方の高射砲のたまのかけらだそうでした。一瞬、もしこれが頭に当たっていたら怪我をしていただろうと思いましたが、ますます火の勢いで、南西の風が強くなってきました。そして、誰かが言いました。「3時間の辛抱、皆もう暫くの辛抱だから頑張りましょう」私たちはそれを一途に待ち続けました。やがて3時間がたつたのであらうか。グワングワン回る音が静かになり敵機が去った様です。でも辺り

は真っ赤な焔に包まれた富山市があるだけ、私たちはぼう然として立ちすくんでいました。夜はしらじらと明けてきました。私たちは助かったのです。明るくなって自分の体を見れば「一晩の苦しみでみるかげもないみすぼらしい姿をしておりました。そして誰の顔を見ても疲労と心配で、また家を失った悲しみに、ぼう然としていました。とにかく私たちの山の山は助かっただけの興奮であてもなく、皆の動く方へぞろぞろと歩き出しました。だんだん火の中で逃げ場を失って死なれた方たちの匂も風に乗って来ます。また、あちこちに怪我人を担架で運ぶ人、だんだん真黒な煙が舞い上がつてきました。歩いている途中に、お腹もひもじくなつて母は、「どうしたらいいかねえ」と言いながら頭の中がボーとして考えられませぬ。皆と一緒に歩いていると、南富山の方へ着きました。そこで、偶然従姉らに会つてはつと、炊き出しのおにぎりももらいました。もう午前10時を過ぎておりました。それから私たちは皆さんの長い列と別れて従姉といっしょに長い距離を歩いて、疎開していた新庄の祖母の家へと向かいました。私は、戦争で空襲に会っているので、息子娘には戦争体験を語り継ぎ、このこわさは絶対に戦争を起こしてはならない。平和な国に住むことが人間の条件だと言ひ聞かせておきます。



氷見市鳥尾海岸に漂着した富山大空襲の犠牲者を供養するため、現地に建立された慰霊像

# 式典

## 1. 富山市の紹介映像

## 2. 「永久の火」入場 とわ 奉持者 富山市立速星中学校生徒

## 3. 国歌斉唱

## 4. 黙とう

## 5. あいさつ 富山市長 森 雅志

## 6. 朗読 「富山大空襲・戦争体験記」から 「空襲体験記」／平井 静子 朗読／声のライブラリー友の会 竹内 瑠美子

## 7. 代表献花及び一般献花

## 8. 「永久の火」昇天